

# 中山間地集落の人口・景観・生業の変遷

—岩手県一関市巖美町本寺地区を事例として—

竹原万雄

本論では、岩手県一関市巖美町<sup>ほんでら</sup>本寺地区を事例として、人口・景観・生業という視点から集落の「開発」と「危機」に注目し、中山間地集落が維持されてきた様相と背景を編年的にまとめた。

最も古い本寺の景観は、山地から流れる沢水や湧水を用水としており、主に自然の湿地を利用する天水田が点々するものであった。そこから12世紀前半頃に平野部中央を流れる本寺川沿いに本格的な灌漑水田を開発した画期があり、そこで戸数の増大もみられた。こうした開発が反映された景観が平野部にみられる一方、そのまわりには豊かな山林が広がっていた。そのため生業面では水田稲作ばかりでなく山林からは木材（植物）そのものの活用、あるいはその加工品が製造されたことに加えて養蚕も行われるなど、多様な生業が展開していた。

18世紀には新田開発による生産高の増加がみられたことに加え、中世同様に田畑以外にも山林を活用した産物を開発するなど、多様な生業に取り組みながら生活を成り立たせていた。こうした生業はとくに平野部一帯に水田が広がる景観を現出させるとともに、屋敷内にいた傍系親族や従属農民の分家・独立を促進した。その結果、18世紀前半には戸数が2倍以上に増加し、大家族構成から小家族構成へと家族構成をも変質させた。

しかし、19世紀前半の天保の飢饉により、戸数・人口共に大幅な減少を経験する。その数を詳細に検討すると、天保10(1839)年に確認できた83戸の屋敷のうち、明治5(1872)年までに2人以下になった屋敷が46戸、そのうち38戸が空屋敷になっていた。つまり、約30年の間で半数以上の屋敷が2人以下という存続の「危機」を経験しており、約45%の屋敷が空屋敷になっていたのである。さらに、そこからの人口「回復」の過程をみると、出生による直系よりも別家・養子によるところが大きかった。続いて別家・養子の出身地をみると、本寺内の移動が最も多く、それに次いで隣村が続くものの、領外からの移動もみられた。こうして、他地域からの移動にも依拠しながら本寺は「危機」から「回復」し、集落を維持することができたのである。

以後、20世紀前半にかけて人口は増加傾向を示すが、その背景にある生業としては農業を主としながらも、とくに養蚕と製炭が盛んであり、それらは一関方面や東京へ販売されていた。また、産物をみると、同じ山野を活用した木工品が多いものの、近世とは異なるものが開発されていた。当時の景観を地籍図から復元すると、周囲の山野は萱生地・山林・林・秣場・草生地・草山・柴山・柴生地・森林・原野など、実に細かく分けられていた。このように詳細に地目をつけていたということは、それだけ山野を多様に活用していたと

いうことであろう。

しかし、20世紀後半の景観を空中写真からみると、昭和42（1967）年は山野の濃淡も薄くなっており、その活用が確認できるが、昭和52（1977）年以降は、樹木が生い茂り、山の色が濃くなっていることがうかがえる。これは高度経済成長期のエネルギー革命が原因であろう。こうした背景もあり、かつての主要生産物であった製炭は昭和30（1955）年から同50（1975）年頃にかけてやめる家が多くあり、養蚕も昭和30年代後半になると徐々に衰退し、近年は人口減が進んでいる。しかし、現代でも本寺では多様な生業を模索しており、ブルーベリーや特産品を目指す「南部一郎カボチャ」の栽培、さらにこれまでの歴史を活用した観光業が生業の一部として確立されている。本寺は現在進行形で新たな生業を見出しながら集落を維持しているのである。

このように、本寺は沢水・湧水を活用した水田開発に始まり、中世以来、平野部の水田稲作の生産高を増加させてきた。それに加えて、周囲に広がる山野を活用しながら時代に合わせて多様な生業を営み、近代以降には一関・東京方面ともつながりながら生活を成り立たせてきた。そのため、戸数・人口は基本的に増加傾向にあり、天保の飢饉のような「危機」を向かえても地区外からの人びとも受け入れながら「回復」することができた。近年は第一次産業の衰退と少子高齢化の影響で人口も減少傾向にあるが、観光業にも力を入れるなど、これまでと同様に時代に合わせた新たな生業が模索されている。以上のことから、本寺という中山間地集落が人口の半数近くを失うような「危機」を乗り越えて集落を維持してきた背景には、消費地ともつながり得る立地のもと、平野部と山野という景観を活用し、時代に合わせて多様な生業を模索してきたことがあったことを指摘した。